

会 議 録

1 会議名

令和3年度第4回安塚区地域協議会

2 議題（公開・非公開の別）

○報 告（公開）

（1）令和3年度地域活動支援事業について

○協 議（公開）

（1）自主的審議事項について（「安塚地域の持続性について（仮）」）

○その他（公開）

3 開催日時

令和3年6月23日（水）午後7時から午後8時55分まで

4 開催場所

安塚コミュニティプラザ 3階 大会議室

5 傍聴人の数

1人

6 非公開の理由

—

7 出席した者（傍聴人を除く。）の氏名（敬称略）

・委員：池田裕夫、池田康雄、石田ひとみ、小松光代、新保良一、中村真二
外立正剛、秦克博、松苗正二、松野修、山岸重正、吉野誠一

・事務局：安塚区総合事務所 岩野所長、大島次長、石川市民生活・福祉グループ長（併
教育・文化グループ長）、村松班長、萬羽主任

8 発言の内容（要旨）

【大島次長】

- ・会議の開会を宣言
- ・上越市地域自治区の設置に関する条例第8条第2項の規定により、委員の半数以上の出席を確認、会議の成立を報告

【松苗正二会長】

- ・挨拶

【大島次長】

本日の会議録の確認は、内規により松苗正二会長にお願いします。

条例第8条第1項の規定により、松苗正二会長から議長を務めていただく。

【松苗正二会長】

それでは、次第3報告事項（1）令和3年度地域活動支援事業について、から議事を進めていく。事務局に説明を求める。

【萬羽主任】

資料No. 1に基づき、令和3年度地域活動支援事業の内定結果を説明。

減額となった事業のうち、やすづか「小さな祭り」開催事業及び自然王国ほその村・四季彩散策（巡り）事業について、事業内容の一部見直しがあった旨を説明。

【松苗正二会長】

事務局から説明があったが、何か御質問等あるか。

【吉野誠一委員】

自然王国ほその村・四季彩散策（巡り）事業については、減額となった部分をそのまま取止めたということで理解できる。しかし、やすづか「小さな祭り」開催事業については、減額に合わせて祭りの日数を調整するなど、帳尻合わせをしているように感じる。地域協議会で採択するかどうかの意思決定をした後、そのような日数の調整を行うことは可能なのか。

【萬羽主任】

やすづか「小さな祭り」開催事業については、審査の結果、補助希望額から14万円減額の70万円ということで内定が出ている。

審査の中で、地域協議会委員の皆様からは、「祭りの運営等について、外部へ委託せず、提案団体自らの手で実施してもらいたい」という御意見が多数あったと記憶している。そのような皆様からの御意見を踏まえ、提案団体自身が実施可能な範囲で内容の精査を行い、最終的に祭りの日数を少し減らすこととなった。皆様からは、「夏と秋の祭りについて、どちらも実施してもらいたい」という御意見もあり、どちらの祭りも実施できるよう、内容の見直しを図ったということである。金額だけを見ると、補助金額に無理やり合わせているように見受けられるかもしれないが、それぞれの祭りについて、内容を精査した結果、そのような形になっているということで御理解いただきたい。

【吉野誠一委員】

納得しかねる。

【松苗正二会長】

事務局から説明があったとおり、地域協議会委員全体の意見を汲んで、飲食の提供を取止めるなど、内容の見直しが行われたということで御理解いただけないか。

【吉野誠一委員】

納得しかねる。見直しの結果、消耗品費が増額となっているが、祭りの日数が減れば、本来、消耗品費も減額になるべきではないか。帳尻合わせをしているように感じる。提案団体自身の意思で事業を提案しておきながら、日数を減らし、消耗品費を増額して調整を図ったという印象を受ける。プレゼンテーションの時に委員からの質問に対して、「事業を見直さなければいけない」という回答をするような事業である。計画そのものが元々しっかりしていなかった気がしてならない。これ以上この場で言っても仕方ないので、次年度以降このような状況が生じないように、お願いしたいと思う。

【萬羽主任】

御意見として承る。ただ、消耗品費については、プレゼンテーションの際に池田康雄委員から、「LEDキャンドルライトの個数が少ないのではないか」という御意見があり、そのような皆様からの御意見を踏まえたうえでの見直しであるということは御理解いただきたい。

【吉野誠一委員】

承知した。

【松苗正二会長】

ほかに御質問等あるか。

(質問なし)

それでは、令和3年度地域活動支援事業についての報告は以上で終了とする。

次に次第4協議事項(1)自主的審議事項についての協議に移る。事務局から何か説明等あるか。

【萬羽主任】

第1回地域協議会終了後に実施した意見交換の内容について説明。

【松苗正二会長】

事務局から説明があったが、何か御質問等あるか。

(質問なし)

それでは、協議を始める。本日は、会議終了後に地域協議会だよりの編集委員会が開催されるため、2時間くらいを目途に協議をお願いしたい。

本日の協議にあたり、事前にある程度各自考えをまとめていただくようお願いしていたところであるので、皆さんの御意見を伺いたいと思う。吉野委員からお願いする。

【吉野誠一委員】

安塚区の将来を考えると、人口減少問題を切り口に本腰を入れて取り組まなければダメであると思う。少なくとも、平成17年の市町村合併後の10年間で、上越市全体の人口が1万1千人減少している。つまり、合併後の10年間で旧東頸城4町村が完全に消滅したことに相当する。現在、恐らく年間2千人くらいずつ減少しており、毎年安塚区が消滅しているような状況である。安塚区を見てみると、さらに急激な速度で人口減少が進行しており、これをどうしたらよいのか、そこから考えていくべきであると思う。

【山岸重正委員】

吉野委員が言われた意見に同感である。それ以外では、以前も述べた学校統合の問題がある。これは、ほかの区に遅れをとってはいけないと思う。皆さんの御意見があればお聞きしたいと考えている。

【松野修委員】

人口減少はなかなか止まらないと思う。そこで、今安塚区にいる人が楽しく、生きがいを持って生活を送れるよう、後押しできる取組みを検討してはどうかと考えている。

【秦克博委員】

人口減少については、いただいた資料を見て、すごい勢いで減っているなど改めて感じた。ただ、これから人口を増やそうというのは、恐らく現実的に難しいと思う。松野委員が言われたとおり、今安塚区にいる人たちでこの地域をどう盛り上げていくかという方向性の方が現実的ではないか。では、どうすればよいのかというと、地域の魅力を発信し、外部から来てもらったり、地元にいる人たちが何らかの方法で地域を盛り上げていくということが必要になると考えている。具体的なものは、自分の中でまだまとまっていないが、大まかに言うとそのような方向性で考えている。

【外立正剛委員】

安塚地域を持続可能なものにするというのは、それ自体が非常に大きな問題である。私は、第1回地域協議会終了後の意見交換の中で吉野委員が言われた工場誘致のお話に大変共感した。水素がこれから大量に必要となるため、空気のいい安塚区に水素工場を誘致してはどうかというお話であったが、大変共感し、自分自身でも調べてみた。工場を誘致できれば、この問題はほぼ解決できると考えている。例えば人口減少について、若い人が来て人口が増えるだろうし、地域の活性化にもつながっていく。目標が大きす

ざるかもしれないが、検討を進め、市へ提案していくような形が良いと思っている。難しい内容かもしれないが、それくらい大きな目標を掲げなければ、安塚地域を持続可能なものにしていくのは難しい。

【中村真二委員】

安塚地域の持続性というテーマで考えた時、突き詰めると2種類の考え方があると思う。

一つは、安塚区全体が何らかの形で持続していくということで、吉野委員が言われたように工場などを誘致して、安塚区全体が生き残っていくという考え方である。

もう一つは、地域というのは良くも悪くもほとんどのことが集落単位で動くため、それぞれの集落が持続していくか、消滅してしまうかを考えるものである。これは、安塚区全体で何かを誘致してどうこうという問題ではなく、集落自体が持続するかどうかという観点から考えることになる。そうすると、それぞれの集落の中で、自分たちの集落が消滅するのを受け入れるのか、持続させるために何かに取り組むのか、選択を迫られることになると思う。現実問題として、もう何年かすると、そのような選択が突き付けられる時が来る。その時、全体として集落に対してどういう問いかけをしたらよいか、今から考えるべきである。持続するためには、こういう条件があって、こういう取組みをすると少しは持続可能性が見えてくるということを提示していく必要がある。それは、移住者の募集や空き家の管理といった細かいことになってくる。何かを誘致するという発想とは別の発想も必要ではないかと思っている。

【新保良一委員】

これは本当に難しい問題であり、すぐに結論が出るのであれば、日本に過疎地や限界集落はないと思う。非常に難しい問題であるが、だからといって何もしないというわけにはいかない。地域の持続性とは、この先何十年とその地域を保ち続けなければいけないということであり、それには人口が重要である。どうすれば人口を維持できるのか考えた時、IターンやUターン、地域から若者を流出させないといったことが挙げられるが、経済が伴わないとそれらは実現できないと思う。

前回の意見交換の中で、工場誘致をしてはどうかという提案に対して、それは不可能であるという意見があった。活性化と持続性というのは似ているようであっても、方法が異なると思う。少人数でも何かをすれば一時的には活性化を達成できるかもしれないが、それは決して持続性にはつながらない。持続性というのは、若い人がいて、経済が伴わなければ実現できない。そういう意味で、企業の持続性と地域の持続性の間には共通

点があるように感じる。市内で成功されている企業の方にお話を聞き、参考にできればよいと考えている。

【小松光代委員】

現在の安塚区内における拠点は、キューピットバレイと雪だるま物産館であると考えている。キューピットバレイについては、(株)スマイルリゾートが指定管理者となり、色々な企画を考え、取組まれているが、地域のにぎわいというのは非常に大事であると思う。また、雪だるま物産館については、地域の人々が品物を出荷し、購入してもらうという、地域経済の核であると思う。ただ、雪だるま物産館の出荷者の高齢化が非常に進行しており、昨年まで出荷していた方が今年は出荷できないという状況が発生している。キューピットバレイと雪だるま物産館が二大拠点として、人と経済のにぎわいを生み出していけるような仕組みを作っていくことが重要であると考えている。

【池田康雄委員】

私もまだ結論は出ていない。先ほど中村委員が集落の話をしていましたが、私の住む戸沢集落も私一人しかいない。今のところ、元気に自分で田んぼもできているので、まだまだ大丈夫だと思っているが、もし脳梗塞などで車の運転ができなくなってしまったら、自分の家には住めないなと思いながら、日々暮らしている。戸沢から大原までの道の草刈りもこれから一人でする予定である。吉野委員の息子さんが戸沢集落で鯉の池を作っている。農薬などがあまり使用されていない場所を選んだのだと思う。そのように戸沢集落に入って、地道に頑張っている方もいるので、まだまだ大丈夫であると考えている。

また、雪だるま高原施設について、(株)スマイルリゾートが指定管理者として運営しているが、必要な部分はテコ入れを行い、再びにぎわいを取り戻してほしいと思う。私は、久比岐野を月5回利用することを目標にしているが、正直なところ全然お客さんが入っていない。私は午後3時頃に行くことが多いが、ほかのお客さんは一人、二人という状況である。署名を集めたり、相当な費用をかけて施設を整備したわりに、はっきり言って、全然利用されていないというのが現状であると思う。小松委員が言われたとおり、にぎわいがある場所として復活できるような方策を考えてみてはどうかと考えている。

【池田裕夫委員】

私もずっと考えているが、なかなかまとまらず、いい案が出ない。非常に難しい問題である。安塚の水や空気が良いと言っても、日本海側はどこもそう変わらないのではないかな。私の実家は、安塚区内で一番奥の伏野集落であるが、昔は小学校が一つあって、私が子どもの頃は小学生が72人いた。今はゼロである。減るのは仕方がないことで、

諦めるしかないのかなという気がしてしまう。しかし、諦めてはいけないので、このような話し合いをしているのだと思う。そうすると、どこかでほかの地域との差をつけるしかない。ほかよりも安塚がいいねと思ってもらうしかない。それがこれまで皆さんが言われたような魅力や工場誘致、キューピットバレイなどになるのだと思う。そのような切り口から進めていければと考えている。

【石田ひとみ副会長】

私の考えも皆さんと同じで、企業や工場誘致といった大きな夢が実現できればよいが、現状からいって難しいと思う。小さなことからコツコツとではないけれども、若い方で手づくりのもので起業されている方がいる。空き家を整備し、アトリエや工房として提供できれば、安塚の魅力の発信や安塚に来てもらうことにつながるのではないか。スキーをする人はキューピットバレイで知っているかもしれないが、それ以外の人にとって、安塚区の認知度は上越市内でも低いと思う。

雪だるま物産館についても、昔はたくさんのお客さんが来ていたが、段々と減ってきている。それは、商品の数が少なくなっているのも要因の一つではないか。山菜などが豊富にあるから、それを求めて雪だるま物産館まで来るといってお話を昔は聞いたことがある。地域の皆さんも年を召されて、自分の山まで山菜を採りに行けなくなっているが、代わりに採りに行ってくれる人はあまりいない。若い人は虫が嫌いで、山騒ぎが嫌だという人が多いそうである。道のりは遠いかもしれないが、若い人に山騒ぎの楽しさを知ってもらうというところから始めて、山菜採りの楽しさを知ってもらい、山菜採りで副収入を得られるというところまで持っていければ、雪だるま物産館のにぎわいや安塚区の魅力の発信につながるのではないか。今は手づくりなどのちょっとしたものでも副業ができる時代であり、何か作ってみたいという人がいたら、こういうところがあるよとすぐに安塚区を紹介できるような下準備をしておいた方が良いと考えている。地域の持続性というのは、永遠の課題であると思うが、皆でアイデアを出し合って進めていければと思う。

【松苗正二会長】

私は以前から話していることであるが、そこで生きていくためには起業を促進するような仕組みをつくるのが一番良いと考えている。前回の意見交換で新保委員が言われていたようにお金を生む、稼げる場所を提供することができれば、人は戻ってきてくれる。起業する環境を多く提供できる形に持っていくことが地域の活性化につながっていくと思う。7年ほど前に中越防災安全推進機構の方が朴の木集落へ来られて、講演をし

ていただいた。講師の方は、「高齢化率をそれほど気にする必要はない。高齢化率が非常に高い集落であっても、そこに若い人たちが移住してくれば一気に高齢化率は下がる。そして、若い人が定住できるということは、そこに魅力を感じるからであり、その魅力を感じたものが商売につながって、成功している事例が非常に多い」ということを言われていて、まったくそのとおりであると感じた。今いる人たちだけでは見えない、分からない部分が存在し、違う視点から斬新な意見などをもらえれば、商売につなげていくことも可能となる。IターンやUターン、移住者を受け入れられる環境を整備するといふところに地域の課題解決への活路があるのではないかと。

皆さんの御意見をお聞きしたところ、やはり人口減少についての御意見が多かったように思う。人口減少をなんとか食い止めることができれば、学校の問題などの解決にもつながっていくのではないかと。人口減少について考えることが、安塚地域の持続性につながっていくものとする。皆さんの御意見をお聞きした中で、御意見等ある方はいるか。

【吉野誠一委員】

これまで皆さんの御意見をお聞きし、今までの安塚を一度振り返ってみていただきたいと思った。スキー場をつくり、これからはお客さんを集めて観光だということをやってきた。また、田舎体験ツアーや色々なイベントで交流人口の拡大にも取り組んできた。しかし、今までの安塚を振り返れば、観光や交流では、人口減少に到底対抗できないということがはっきり分かるはずである。須川集落は、スキー場ができてからどれだけ人口が減少しているか。そういったものは幻想だと思った方がよい。今までのように、訪れていいまちをどうやってつくって、にぎわいを求めるかという考え方はやめて、ここに住んでいいまちにしなければいけない。そのような考え方が大事であると思う。

定住人口の増加は、就労人口の増加に比例するというのが定説である。働く場所がなければ若い人もいないし、人口も増えない。働く場所をどうするかと考えた時、色々な国際情勢、気候変動の状況等を踏まえると、NEDO（国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）に働きかけを行い、日本2番目、裏日本1番目として、水素工場を誘致すべきであるとする。社会情勢にも合っている。

安塚は中学3年生、高校3年生の人口が既に随分減っているため、社会減はそれほど影響しない。その分、自然減がものすごく深刻化する。いわゆる亡くなってしまう方である。将来人口推計によれば、このままのペースで人口が推移していくと、2035年には1,082人の見込みとなっているが、800人や900人になっている可能性だって

ある。

手遅れでどうにもならないくらいであるが、たまたま温室効果ガス46パーセント削減という目標を国際的に宣言したこの機を上手に捉えれば、水素工場などの誘致ということになるのではないか。市の行政というよりは政治がどこまでその気になって踏ん張れるかにかかっているのだと思う。その気にさせるためには、地域協議会からボールを投げない限り、そういうふうを考えてくれないと思う。

【松苗正二会長】

ほかに御意見のある方はいるか。

【外立正剛委員】

今まで安塚町時代からやってきたことは、色々な面で正しくやってきたと思う。しかし、吉野委員が言われたように人口の増加にはつながっていない。イベントをやっても、花火のように散って終わってしまう。そのような状況において、小さな魅力あるものを作り上げていくということも必要であるが、人口の増加へつなげるために、地域協議会の考えを市にぶつけなければならない。ほかの地区の地域協議会の取り組んでいるテーマを見ても、地域の活性化に関するものが多いが、それではもう遅いと思う。人口2,000人を割ってしまうような状況の中で、人口を増やす方策を考えると、企業や工場の誘致のようなものを考えなければ無理であると思う。市や県、国に対して、このようなことを考えているがどうか？というふうにビジョンを示すくらいでないと、安塚区の人口は増えない。中村委員も言われていたが、将来的に消滅してしまう恐れのある集落も何集落かある。集落の中で話し合いをしても、なかなか前には進まないと思う。思い切った考え方で夢を見てもよいのではないか。それをぶつけない限り、市も県も国も動かない。それですべてが解決するとは思わないが、安塚区を存続させていくためには、そのようなテーマが良いと考える。皆さんの御意見はいかがか。

【新保良一委員】

私も今ほどの意見には大賛成であるが、企業を誘致するための受入れ体制というのも十分に考えなければならない。企業側の条件も様々で、大規模な要請があることが想定される。それに応える体制を整えなければならない。ただ誘致してくださいと言うだけではなく、受入れ体制などもしっかりと検討することで、市や県も動いてくれると思う。来てください、来てくださいだけでは問題がある。企業や工場の誘致自体には私も大賛成であり、経済が回っていなければ、若い人が定着しないことははっきりしている。

【松苗正二会長】

ほかに御意見のある方はいるか。

(質問なし)

新保委員が言われたとおり、企業や工場の誘致には高いハードルがあると思う。そのハードルをクリアするためにどのようなものが必要となるのか、魅力のあるものを提供できるのか、検討するのは非常に難しい。例えば吉野委員が言われている水素工場については、水素は水をはじめとしてどこにでも存在するものであるが、取扱いが非常に難しいため、誰も実現できていない。日本郵船(株)は水素を輸送するタンカーを造ったりしているが、水素をタンカーで運ぶということは、日本で生産することがなかなか難しいからタンカーを造ってどこかから運ぼうとしているのだと思う。一朝一夕で水素が簡単にできるわけではない。今まで水素があまり出てこなかった理由はそこにある。最近の水素以外にアンモニアにも関心が高まっている。アンモニアもどこにでもあるし、作るのが簡単である。アンモニアにしても、日本国内ではまだ難しいのが現状である。個人的にこれらは非常に難しい次元の問題であると感じている。水素に限らず、国が政策的に後押しているものはたくさんあり、それについて検討することも大切かもしれない。しかし、安塚に持ってこれるかどうかを考えると、やはり難しいと思う。その点について、吉野委員はどのように考えているか。

【吉野誠一委員】

水素工場について、私は福島工場へ見学に行ったことがある。要するに水を電気分解するのである。そのために、大量の太陽光パネルを並べて、化石燃料を一切使わずに水を電気分解する。広大な土地があれば、すぐにできる。安塚に水素工場を誘致することができた場合、上越火力発電所が水素発電に代わるまでは火力の電気を使って電気分解する必要があるが、パイプラインさえできればそれがなくなる。市の実情から言っても、直江津港の活性化というのは大変重要な課題である。今回、高速カーフェリーのあかねを売却することにもなった。そのような状況を考えると、なかなか面白い提案になると思う。先に提案しなければ、ほかに取られてしまう。なぜ、私が水素にこだわっているかというと、太平洋側では福島県に水素工場があり、それもNEDOが主導して東芝エネルギーシステムズ(株)などと一緒に建設を進めた。NEDOに対して、政治がどのように働きかけをするかが重要となる。そのところが難しいとは思う。

いずれにしても、我々地域協議会委員がそこまで心配する必要はない。地域協議会として、このような考えを持っているが、政治はどのように動いてくれるのかということ

である。何かしなければ、動いてくれない。私が言いたいのはそういうことである。恐らく市にそのような情報を持っている職員はいないと思う。今、私がNEDOと言っても、皆さんの中に知っている方はほとんどいないと思う。そのような機関に働きかければ、国策で国の補助金がつき、裏日本のモデル事業としてできるのではないかという計算もある。そういう方向に持っていくためには、政治が頑張らなければダメである。私たちは、アイデアを出すだけである。受入れ体制をどうするかといった議論は、誘致が決まってからの話であり、今ここで考える必要はない。

【新保良一委員】

吉野委員、それはさすがに言い過ぎではないか。誘致するとして、企業側から土地や水がこれだけ必要であるというような条件が示されたら、どうなるのか。詳しいところは分からないが、工場はほとんどの場合、水が必要になる。ここは用水がなく、沢の水だけでやっているところである。工場にすべて水が取られてしまうと、農業をされる方への支障をきたすのではないか。そういった点を何も考えず、誘致を提案するというわけにはいかないと思う。

【吉野誠一委員】

その点については、誘致する側の市が考えればよい。我々はアイデアをぶつけるだけである。こういうアイデアがありますということで意見書をまとめ、ぶつけるだけである。実現に向けて市が動くことになった場合、土地や水はどれくらい必要か、ダムをどのように造らなければならないか、といった点は市が考えればよい。我々にそこまで考える時間や知識はない。

【新保良一委員】

一般の方は、どれくらい水が取られてしまうのかなど、なおさら分からないと思う。

【吉野誠一委員】

水が取られないようにすればよい。ダムを造るとか、色々な方策がある。この先10年、15年という時間がかかるとすれば、農業従事者も相当減少し、農地も荒れる一方ではないか。

【新保良一委員】

もちろんそうなると思うが、今は農業をしている方も一定数いる。

【小松光代委員】

工場誘致は実現すれば素晴らしいと思うが、我々の任期中にそれをまとめた意見書を市へ提出し、あとは市や県が考えることだというような姿勢はどうなのか。工場誘致は

結論が出るまでに何年もかかるものであり、理想を高く掲げることは素晴らしいことであると思うが、現実的に安塚が今直面している身近な問題に目を向けるべきであると考ええる。

【松苗正二会長】

企業誘致、工場誘致が実現できれば素晴らしいことであると思うが、それを意見書にまとめて市へ提出しても、無理であるというふうになってしまうのではないかと。やはり誘致をしてもらいたいのであれば、ある程度その内容について事細かに議論し、詰めなければならないと思う。そうでないと、市の検討の土台にも乗らない気がする。意見書を提出するためには、誘致が可能となる環境整備についても検討する必要がある。

地域協議会として、それらの誘致を検討すること自体は大切であると思うし、人口減少について議論する中で、あわせて考えることもできる。私としては、安塚区の持続性という方針で進めていくのであれば、大半の委員からお話のあった人口減少について検討してはどうかと考えている。安塚区の持続性というテーマの中に人口減少を盛り込んで、どうしたら人口減少を食い止めることができるのか、議論していければと思う。秦委員はいかがか。

【秦克博委員】

私自身は、先ほど申し上げたとおり、人口減少を食い止めるのは無理だと考えている。工場誘致やIターン、Uターンと言っても、果たして何人来るのか。何百人も来るとは思えない。今の減少ペースで進めば、外部から入ってくるよりもそれ以上に減っていくのは間違いない。人口が減っていく中で、どうやっていくかを考えるべきであると思う。

【松苗正二会長】

池田裕夫委員はいかがか。

【池田裕夫委員】

私は吉野委員の考え方に寄っている。皆さん、色々な案を出されており、自主的審議事項として意見書を市へ提出できればよいと思っている。結論はもう出ていると思う。その結論を地域協議会としてどういうふうにまとめていくのか、もう議論を始めてもよいのではないかと。キューピットバレイや雪だるま物産館といった個々の施設について議論しても、限界があるし、一時的で持続性はない。吉野委員の案をどのようにまとめ、意見書として提出すべきか、議論してはどうか。

【松野修委員】

吉野委員にお聞きしたい。水素はこれから何に使うのか。

【吉野誠一委員】

恐らく皆さんが乗っている車はほとんど電気や水素に代わっていく。世界の潮流はそうである。それから、発電所もほとんど水素に代わる。様々なものが水素になる。

皆さんの手元にある市創造行政研究所が発行した資料の中に、持続可能な定住促進が実現した場合の人口推移というものがある。毎年3組の30代前半夫婦と4歳以下の子ども、さらに毎年3組の20代前半夫婦が転入してくる場合であっても、2055年の安塚区の人口は809人という推計が出ている。だから、IターンやUターンといった取組みをしたところで、人口増にはつながらないということである。自然減でどんどん減っていく。もう30年前にこのような話が出ていれば違ったかもしれないが、今となっては何もできないような状況である。ほとんどの区民の方は諦めてしまい、先のことは考えなくてよいと思っている。そんなことを言っていたらじり貧もいいところで、どうにもならなくなってしまう。

この際、奇想天外な発想かもしれないが、工場誘致のようなものを打ち出し、決して夢物語ではないんだということを市へ訴えかけて踏ん張ってもらえれば、なんとかなるのではないか。それほど気候変動などは厳しい状況にある。世界中で、経済を成長させるために化石燃料からどうやって転換するかということが経済のポイントになっている。やれるかどうかは分からないが、いいアイデアであると思う。地域協議会と市の意見が対立した場合、地域協議会は市の附属機関であるので、最終的には市長の判断で決まるというようなことも言われるが、それではモチベーションもなかなか上がらない。それでも、諦めずにぶつけていくということは大事であると思う。

【松苗正二会長】

池田裕夫委員の先ほどの御意見は、テーマは工場誘致についてでもう決まりではないかということか。

【池田裕夫委員】

少し言い過ぎたかもしれない。吉野委員のお話を聞いていると、もし市がその提案を受けて検討を始めた場合に、安塚ではなくもっと市の中心部に近い清里や牧でもよいとなってしまう気がする。市全体で検討しようということになってしまっただけでは、元も子もない。安塚でなければダメだというふうにそこでもほかとの差をつけられなければ、提案できないと思う。

【松苗正二会長】

池田裕夫委員が言われたとおりだと思う。企業誘致、工場誘致をするためには、我々

のビジョンを持たなければいけない。気概のようなものを市に見せなければ、手を挙げているだけでは来てもらえない。企業誘致、工場誘致がダメだということではなく、するのであればそういったものが必要ということである。また、先ほどパイプラインで水素を運ぶというお話もあった。水素というのは、大変揮発性が高く、マイナス何百度という温度で冷凍しないと液体化していかない。運ぶことが非常に難しい。パイプラインでそんなに簡単に持ってこれないのではないか。太陽光発電で水素を作ることはできるけれども、それが普通にできるのであれば皆やっていると思う。なかなかうまくいかないので、実現できないというのが現状である。川崎重工(株)は水素を貯蔵するタンクを開発したり、岩谷産業(株)は水素ガスの供給に一生懸命取り組んでいるが、現状は厳しい状況が続いている。

【吉野誠一委員】

岩谷産業(株)は福島県の水素製造施設の建設に参加した。

【松苗正二会長】

水素関連の事業の勢いはすごい。様々な企業が一生懸命取り組んでいる。しかし、それを安塚に誘致するためには、企業にとっての魅力を示さなければならない。

【吉野誠一委員】

発想がどうもマイナスなように感じる。そのようなことは市が考えればよい。市が決めるための動機づけを意見書で提出しようというだけである。

【松苗正二会長】

それだけでは意見書を提出しても耳を傾けてもらえず、無理であるという結論になるのではないか。

【吉野誠一委員】

どうしてそんなことが分かるのか。

【外立正剛委員】

安塚区の持続可能性を考えるうえで、これ以上ないテーマであると思う。夢を持ってよいと思う。夢を持って、それをぶつけていくという考えでいいのではないか。安塚区を持続可能なまちにするためにということで話し合ってきている。色々な現状の課題を解決するために地域協議会としてこのように考えているという意見書をぶつけてよいと思う。キューピットバレイや雪だるま物産館を活性化させたいと言っても、実際に人は来てくれていない。一生懸命考えてイベントを実施しているが、人は集まっていない。何もしないということではなく、それはそれとして、大きなテーマを掲げて、皆で勉強

しながら意見書を市へぶつけてよいと思う。市からダメと言われてもぶつけていくしかない。そうしなければ前へ進まない。

【松野修委員】

意見書をまとめるだけの知識がない。これから勉強しても、この任期中にまとめる技量は身につかない。意見書として提出するのであれば、地域協議会としての責任も必要である。現実問題として、どのように進めていくかという理論だった説明になるよう、知識や具体性がある初めて市を動かすことができる。それを行政任せにするのであれば意見書を出すべきではない。それは自分たちの意見ではない。私自身は地域協議会委員として、このテーマで意見書をまとめて提出できる自信はない。

【松苗正二会長】

企業誘致に反対しているわけではない。この場で企業誘致について議論してもまとまらないと思う。私としては、人口減少について考える中で、企業誘致や地域の活性化といったことを議論していければと考えているが、いかがか。

【中村真二委員】

吉野委員の意見に対しては、共感する部分と不安な点がそれぞれある。これまでの議論の流れとして、企業誘致についてはばかりになっており、できるのであればそのようなテーマでもよいかと思う。一方で、水素についてはあまり勉強していないので分からないが、吉野委員の意見を聞いていて不安に感じた点が多くなってきた。例えば太陽光パネルやダムについての話などである。そういった点について、勉強する機会を設けられるのであれば、専門家の方にお越しいただいて話を聞いてもよいかも。ただ、地域協議会として市へ意見書を提出するのであれば、ある程度勉強していかなければならない。

私が本日最初に述べたのは、地域の持続性については2種類あって、地域全体を残していこうという発想と集落という単位に着目する発想である。私としては、後者の発想で進めていきたい。先ほど、ほかの委員から山菜についての話があったが、地域にあるものを活用するという発想はまだ可能であると思う。私は山菜料理が大好きで自分でも採りに行きたいと思っているが、どれが食べられるのかさえ、分からないレベルである。山菜学校のようなものを作ることができれば、興味のある人を集めて、山菜の見極め方や処理の仕方を学ぶ場になり、そういう取組みでもよいと思う。地域の資源としてはほかに森林などもあり、木材の活用は一般的に商売にならないと言われているが、自伐型林業というジャンルがあり、もっと個人のレベルで木を扱うという考え方もある。

そういったことも勉強するテーマとしては面白みがあるし、できることを発掘するという作業は地域協議会として取組んでもよいと思う。

余談であるが、ダムを造るのであれば、ダムでそのまま水力発電をした方がよいと思っている。可能であれば、そういうことを検討するのも面白いと考えている。

【吉野誠一委員】

私はダムを造ると言ったわけではない。それは市や国、NEDOなどが考えることである。ただ、ダムを造るだけの水量は雪に恵まれた土地であるため、方法は色々あると思う。

中村委員や小松委員が言われたように、交流人口を増やそうとしても、これまでの安塚の取組みを見れば分かるとおりに、人口減少に対しては何の効果もない。観光と言っても、これからパンデミックがほとんど常態化する可能性がある中で、一つ感染症が起これば、それも進められなくなる。

水素工場の誘致については、真剣に考えている。パリ協定において、2050年には温室効果ガスを実質ゼロにするというのが世界の目標になっており、日本も批准している。今年の4月にアメリカが主催した気候サミットへ菅首相が出席し、温室効果ガスの削減目標について、2030年に46パーセント削減、2050年に実質ゼロにするということを国際的に約束してきたのである。この機会を捉え、気候変動に絡めてNEDOを動かし、安塚に来るかどうかは分からないが、候補地の一つとして国策で水素工場の誘致に手を挙げてはどうかということを申し上げている。このような状況を考えれば、意見書を出しても門前払いにはならないと思う。案外、市の方が飛びついてくるくらいの面白い発想かもしれない。今度、企画政策課の方へも話に行きたいと思っている。市創造行政研究所の職員へ話に行った時も、初めて耳にする提案だと言っていた。このような具体的な話は今までないということであった。データなどは市創造行政研究所の方でいくだけでも作ってくれる。

【松苗正二会長】

データは作ってもらえるかもしれないが、誘致してもらえるかどうかは別である。土台がなければならない。

【吉野誠一委員】

土台とはどういうことか。

【松苗正二会長】

場所も必要になる。

【吉野誠一委員】

そんなことは誘致する側が考えることである。我々はアイデアを意見書にまとめるだけである。それを進めるかどうかを判断するのは市であり、実現する力は政治である。

【松苗正二会長】

吉野委員の御意見に対して、御意見等ある方はいるか。

【中村真二委員】

地域協議会として判断する材料が足りなすぎる。何かしらの勉強をしないことにはどうしようもないと思う。それをしたうえで、地域協議会の総意として意見書を提出するのであれば問題ない。現段階では、私としては不安が残る。そういった勉強をしてから、意見書を出すかどうか議論するという順番ではないか。今は意見書を出すということが明確化され過ぎている気がする。

【吉野誠一委員】

意見書を出すための自主的審議事項ではないのか。

【松野修委員】

そうとも限らないと思う。

【松苗正二会長】

もちろんそれに向かって議論をしていく。

【吉野誠一委員】

ということは、出すということではないのか。

【松苗正二会長】

出す方向で議論をする。

【吉野誠一委員】

そうとも限らないとはどういうことか。

【中村真二委員】

水素工場の件について、現段階で意見書を出すかどうか決めるのであれば反対である。何にも分からない。環境に相当な影響を及ぼす恐れのある太陽光パネルを大きな土地に設置するからには、地域協議会として分かっていないと意見書を出すことができない。

【吉野誠一委員】

太陽光パネルは使わない。とりあえずは火力の電気を使い、工場やパイプラインができれば、火力は水素に代わる。

【松苗正二会長】

吉野委員の御意見は、今はL P ガスで火力発電をしているが、それを水素に代えるということによろしいか。

【吉野誠一委員】

そうである。

【松苗正二会長】

そうすると、水素はどうやって生産するのか。

【吉野誠一委員】

それは火力を使う。パイプラインができるまでは火力を使うしかない。

【松苗正二会長】

火力発電は直江津にあって、そこで生産した水素を安塚まで持ってくるのではないか。

【吉野誠一委員】

安塚で水素を生産するのである。それをパイプラインで直江津港に送れば、火力発電が水素発電に置き換わる。

【松苗正二会長】

安塚でどうやって生産するのか。

【吉野誠一委員】

当面は火力を使う。当面は火力を使って、水素工場を稼働させる。しかし、パイプラインができれば、直江津の火力発電が水素発電に置き換わる。その時点で化石燃料を一切使わないでできるようになる。少しタイムラグがある。

【松苗正二会長】

安塚でどうやって生産するのが、私には分からない。

【吉野誠一委員】

水を電気分解する。

【松苗正二会長】

電気分解はどうやってするのか。

【吉野誠一委員】

電気と水を使う。

【松苗正二会長】

電気分解をする元は何か。

【吉野誠一委員】

工場である。それを水素工場という。

【池田裕夫委員】

熱源は何かということではないか。

【吉野誠一委員】

エネルギー源は当面火力を使う。パイプラインができれば、直江津火力発電所は水素に代わるので、その時点で化石燃料を使わないで水素を出し続けられるようになる。

【松苗正二会長】

水を電気分解して水素ができるわけであるが、電気分解するための元は何か。

【吉野誠一委員】

電気と水である。

【松苗正二会長】

電気はどこで生産するのか。

【吉野誠一委員】

とりあえずは火力の電気を使うほかない。

【中村真二委員】

今のお話が軌道になると永久機関のようになるということか。

【吉野誠一委員】

永久機関とはどういうことか。

【中村真二委員】

水素工場で水素をつかって、水素発電所で電気をつくり、その電気で水素をつくるということの流れになり、余った電気がどんどん使えるということか。

【吉野誠一委員】

余った電気ではなく、水素工場で水素を生産すれば、それをパイプラインで直江津港まで運び、直江津港からその水素が日本全国へ運ばれる。

【中村真二委員】

水素をつくるための電気を水素発電所でつくり、水素発電所でつくった電気を使って水素工場で水素をつくるというループになると思う。その時に電気は余らないのか。

【吉野誠一委員】

どういうことか。

【中村真二委員】

電気が余れば電力として使えると思う。このループの中で電気が余るのか、水素が余るのか、あるいは両方とも余るのかという話である。

【吉野誠一委員】

余るとはどういう意味か。

【中村真二委員】

水素工場で電気を使って水素を10つくったとする。10の水素を水素発電所に持ってきて、電気を10つくったとすれば、水素は余らない。

【吉野誠一委員】

言っている意味がよく分からない。

【中村真二委員】

私は吉野委員の言っていることが分からない。

【吉野誠一委員】

仮に水素工場ができたとする。当面の間は、東北電力の電気を使って、水素を生産する。しかし、パイプラインができれば、パイプラインを使って恐らく直江津の火力発電所は水素発電所に代わるはずである。水素発電所に代われば、水素工場の電気は水素発電所のものを使えるようになる。水素をどの程度生産するかは分からないが、1億トン生産するとすれば、輸出も可能になるし、高速道路の水素ステーションにも使えるかもしれない。

【中村真二委員】

よく分かっていないが、今の内容が実現すると、夢の永久機関になるように感じた。それをもう少し素人でも分かるように勉強させてもらわないと、反対も賛成もできない。

【吉野誠一委員】

私は賛成してほしいと言っているわけではない。パリ協定で気候変動をどうするかが大きな問題になって、日本経済発展のためには化石燃料をなくすイノベーションをつくらなければいけないという世の中の傾向になっている。実際にトヨタやホンダといった自動車メーカーはガソリン車やハイブリッド車をやめて、水素自動車や電気自動車に軸足を移している。そういうことを考えれば水素の需要はいくらでもある。要するに、日本海側の拠点となるような水素工場を市内、できれば安塚区のような過疎地に誘致すれば、過疎を食い止めることもできる。私はほかのところで発表するために論文も作っている。

【岩野所長】

事務局からの提案である。本日の協議については、この辺りが限度ではないかと感じている。本日必ず結論を出さなければいけないということではなく、自主的審議事項のテーマについては皆様から納得いただいたうえで決定をお願いしたい。それぞれお考えもあるかと思うので、本日は一旦締めて、テーマの決定については継続協議としてはどうか。

（「了解」の声多数）

【吉野誠一委員】

しかし、十日町市の松代に同様の考えを持っている人がいるので、先に手を挙げなければ勝てない。また十日町に持っていかれてしまう。

【松苗正二会長】

事務局から提案のあったとおり、本日の協議はここまでということによろしいか。

【外立正剛委員】

例えば雪だるま物産館やキューピットバレイの活性化をテーマにする場合、JCVなどで若い方の取組みが紹介されているので、そういった個人の企業家の方の意見も聞いてみてはどうか。水素工場の誘致のような大きなテーマとは別にそのような検討を進めてもよいと思う。

【新保良一委員】

今の外立委員と同様の意見は私も本日最初に申し上げた。企業の持続化と地域の持続化には共通点があり、企業で成功している方のお話を聞いてはどうかということである。それから、キューピットバレイについての意見がいくつか出ていた。(株)キューピットバレイが昨年解散し、(株)スマイルリゾートが新たに指定管理者となっているわけであるが、スマイルリゾートもホスピタリティパートナーズグループというグループ会社の一つでしかない。代表である田中社長は50歳代くらいの方で、一代で年商100億のグループ会社を築いたということである。そういった方のお話を聞くことができれば、地域の持続性のヒントになるのではないか。大変忙しい方で講演をしていただけるかは分からないが、キューピットバレイの支配人も発想の仕方などがこれまでの方とは異なる。

【松苗正二会長】

事務局から提案があったが、ずっと議論をしても決まらない気がしている。企業誘致ももちろん必要なことであると思うし、新保委員や外立委員が言われた企業の方のお話を聞くということも大切である。それらの内容も組み入れつつ、人口減少という大

きなテーマがあると思うので、細かい内容はグループに分かれて議論してはどうかと考えている。吉野委員はいかがか。

【吉野誠一委員】

私は自分が挙げたテーマにこだわっているわけではない。皆さんにお任せする。

【松苗正二会長】

小松委員はいかがか。

【小松委員】

松苗会長が言われたのは、企業誘致を検討するグループと企業の方のお話を聞きながら地域の課題解決を検討するグループに分かれて進めていくという提案か。

【松苗正二会長】

最終的には全体で協議することが必要であるが、企業誘致を検討するのであれば分科会のように別のグループを作っても構わないと考えている。ただ、検討した結果については、皆さんに対して報告してもらい、協議をすることになる。このままでは回を重ねても前へ進まず、決まらないように感じる。安塚区地域協議会は、安塚地域の持続性を最大のテーマとして、人口減少について検討することとし、これまでの御意見で出てきた内容をその中に含めていってはどうかと考えている。そのような方向性でよろしいか。

【松野修委員】

人口減少は難しいと思う。人口減少について議論しても結論は見えない。キューピットバレイや雪だるま物産館といった既存施設の持続性について議論した方が進めやすい。人口減少を食い止めるのは現実的に難しい。水素工場の誘致という大きな話もあったが、それが実現できたとしても30、40年先になれば人口1,000人を割っているかもしれない。今活躍している人や施設を盛り上げて、持続を図るという意見をまとめていけばよいと思う。

【松苗正二会長】

そのような考えも大切であると思うが、そうなるとキューピットバレイだけの話になってしまって、これまで出た意見を活かせなくなる。人口減少の中にキューピットバレイの話も含めればよいのではないか。

【吉野誠一委員】

先ほども申し上げたように手元の資料にも書かれているが、人口減少はIターンやUターンの促進という取組みで解決できるものではない。

【松苗正二会長】

安塚地域の持続性がテーマということで、敢えて人口減少は入れなくてもよいか。

【松野修委員】

そう思う。

【吉野誠一委員】

人口減少が持続可能性の切り口ではないか。

【松苗正二会長】

すぐにまとまりそうにないので、本日はここで終了とする。人口減少についてということ踏まえて議論をし、その中で企業誘致や地域の活性化策を検討するという形で進めることとして、よろしいか。

(「はい」の声多数)

それでは、安塚地域の持続性を基本テーマとして、人口減少について検討するという事で次回以降進めていく。

【中村真二委員】

各地域協議会で現在審議中の自主的審議事項テーマ一覧の中で、中郷区地域協議会の子どもに関する審議事項が載っている。本日最初に山岸委員から学校統合についての意見があったが、参考になる部分があるのではと思った。中郷区に知り合いがいて、どんな取り組みをしているか聞いたことがある。自主的審議事項とは別に視察研修のテーマにもなるかもしれない。

【松苗正二会長】

それでは、自主的審議事項についての協議は以上で終了とする。

次に安塚区地域協議会としての審議内容について、確認を行う。事前に事務局へ審議依頼書の提出はあったか。

【大島次長】

事前の提出はない。

【松苗正二会長】

今回審議依頼書の提出はなしということで、審議依頼事項がある場合は、また次回協議会開催日の1週間前までに事務局へ提出をお願いしたい。

次に次第5その他(1)次回協議会の開催日について確認する。はじめに事務局から説明をお願いする。

【萬羽主任】

諮問事項の関係で、第5回地域協議会は8月6日（金）、第6回地域協議会は9月3日（金）を開催候補日として、検討をお願いしたい旨、説明。

【松苗正二会長】

事務局からの説明のとおり、次回第5回地域協議会は8月6日（金）を開催候補日にしてもらいたいとのことであるが、よろしいか。

（「はい」の声多数）

それでは、次回第5回地域協議会は8月6日（金）午後7時から開催とする。

引き続き、第6回地域協議会については、9月3日（金）を開催候補日にしてもらいたいとのことであったが、よろしいか。

（「はい」の声多数）

それでは、第6回地域協議会は9月3日（金）午後7時から開催とする。

ほかに連絡事項等あるか。

【萬羽主任】

そのほかの配布資料について説明。

【松苗正二会長】

会議の閉会を宣言

9 問合せ先

安塚区総合事務所総務・地域振興グループ TEL：025-592-2003（内線23）

E-mail：yasuzuka-ku@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料も併せて御覧ください。